

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	渡邊 峻平	指導教員 (主査)	沢崎 達夫

論文題目	第二反抗期における親とのコミュニケーションが アサーションと過剰適応に及ぼす影響
------	---

本文概要

【問題と目的】

青年期には親から距離を取ろうと反抗的な態度を示す、第二反抗期と呼ばれる現象がある。近年、青年期に反抗を示さない子どもが増えており、第二反抗期の程度における親の対応について検討が必要であると考えられる。また、青年期における親子関係について、Condon, Cooper & Grotevant (1984)は心理社会的な発達に重要な親子間のコミュニケーションとして、個性化モデルを提唱している。そこで、青年期における対人関係の問題の一つである過剰適応と、対人関係に関する考え方の一つであるアサーションを挙げ、個性化された親のコミュニケーションが子どもの過剰適応やアサーションといったコミュニケーションの問題や考え方に影響を及ぼすかを検討した。さらに、親のコミュニケーションの影響について、子どもの第二反抗期の高低による比較検討を行った。

【研究方法】

大学生に対し、自己記入式無記名の質問紙調査を実施した。使用尺度：①第二反抗期尺度(杉山・長谷川, 2013)②認知された親子間コミュニケーション尺度(平石, 2007)③青年用アサーション尺度(玉瀬・越智・才能・石川, 2001)④大学生用過剰適応尺度(石津・齊藤, 2011)⑤フェイスシート(性別, 年齢)

【倫理事項】

調査への協力は回答者の自由意思であり、回答を拒否する権利があること、得られたデータは研究目的以外には使用せず、統計的に処理し個人が特定されないことを口頭及び書面にて説明し、同意を得られた者に対してのみ回答を求めた。

【結果と考察】

回答が得られた 350 名の内、回答に不備のあったデータを除いた 287 名(平均年齢 19.12 歳, $SD=1.16$, 男性 107 名, 女性 177 名, その他 3 名)を分析の対象とした。各尺度について因子分析を行った結果、十分な信頼性係数を得た。因子分析の結果をふまえて、各尺度間の Pearson の相関係数を求めた。その結果、「第二反抗期」と親の「結合性」に弱い負の相関を示した。母親と父親のコミュニケーションがそれぞれアサーションと過剰適応に、アサーションから過剰適応に向かうパスを仮定し、パス解析を行った。その結果、「反抗期低群」では、父親のコミュニケーションがアサーションに中程度の正の影響を示し、アサーションが内的側面に中程度の負の影響を示した。「反抗期高群」では、父親のコミュニケーションが「関係形成」と「説得交渉」に中程度の負の影響、「内的側面」と「外的側面」に強い正の影響を示した。さらに、「関係形成」が「外的側面」に中程度の正の影響を示した。

以上の結果より、子どもの反抗的な態度と親の話を聞こうとする態度が関連していることが示唆された。また、「父親コミュニケーション」が心理的自立を促進し、「アサーション」と「過剰適応」への影響を及ぼすものと推測された。今後、母親と父親の独自性と結合性の組み合わせを検討することによって、第二反抗期への両親のコミュニケーションの示唆が得られると考える。

【主要な参考文献】

平石賢二(2007) 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版